Tierra

ティエラ

Vol.78

positive thinking !!
Smiling
Be yourself
I like the idea

『あなたにとってMerry(幸せ)とは何ですか?』

ビジネスをサポートするオンラインマガジン【ウェブティエラ】

http://www2.hitachi-kenki.co.jp/tierra/

笑顔のプロジェクト

景気は上向きという言葉は聞かれるものの、災い続きでなかなか心の底から笑うのは難しい今日このごろ。
だが、つらい状況のときこそ、笑うことが自分自身を力づけ、その笑顔に周囲が勇気づけられることもある。
アートディレクターの水谷孝次さんが進める"笑顔のプロジェクト"は、笑顔がもつ力の大きさを教えてくれる。

◎取材・文／江森 孝　◎写真提供／水谷事務所

"百万ドルの笑顔"という言葉があるように、素敵な笑顔には価値がある。しかもその価値は、どんな大金にも換えられないほど大きく、人の心を動かすことがある。

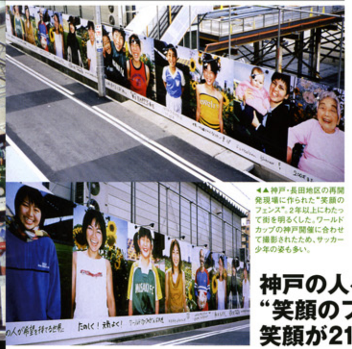
水谷さんが手掛ける「メリー・プロジェクト」(以下、メリー)は、そんな大きな力を秘めた笑顔を世界中に広めていこうという試み。

水谷さん自身がカメラを持ち、街を歩く人々に「あなたにとって、メリー(幸せ)とは何ですか?」と問いかける。それに対する答えと笑顔を大きなパネルにし、壁に架けたり上から吊したりして笑顔だらけの空間をつくり上げる。

「つくり笑いじゃなく、リアルな笑いが大事。自然な笑いを引き出すため、カメラを2台使ったり、思い切り近づいたりして気が緩んだ表情を撮るんです」

たしかに、水谷さんの撮影した笑顔はどれも素直。引きつったり、無理やり笑った顔はひとつもない。見ているこちらの口元も自然に緩んでしまう。これがズラリと並んでいるのを見れば、さぞかし幸せな気分になれるだろう。

世界一のお嫁さんになりたい



◀▲神戸・長田地区の再開発現場に作られた"笑顔のフェンス"。2年以上にわたって街を明るくした。ワールドカップの神戸開催に合わせて撮影されたため、サッカー少年の姿も多い。

神戸の人々を勇気づけた"笑顔のフェンス"。笑顔が21世紀の地球を救う。

メリーの本格的なイベントが初めて開かれたのは2000年1月。東京のファッションビル「ラフォーレ原宿」が会場だった。それまで多くの商業ポスターや商品パッケージのデザインを手掛けていた水谷さんいわく、当時は「自分も世の中もガックリきていた」世紀末。現代美術を見ても、暗い作品が多かったという。

「でも、21世紀は"夜明け"の時代になる。そんな予感がしました。会場の担当者も、僕が持ち込んだ笑顔のポスターを見て、『いろいろあったけど、2000年は"笑顔"かな』といったんです」

ビルへ買い物にやってくる若い女の子たちを撮影した笑顔は、期間中にどんどん増えていった。やがて展示会場を飛び出し、階段や建物の外にまで笑顔があふれた。

「それを見て、『この子たちがいるから日本は大丈夫だな』と思えたほど、関わった男たちは感動したんですよ。彼女たちのパワーや個性、感性が21世紀の日本や地球を救うだろうって」

その後、ロンドンと東京をインターネットで結ぶイベントも成功させたメリー。だが水谷さんには、メリーをもっと社会を意識したものにしたい思いがむくむくと湧いた。それが実現したのが、2001年の「メリーイン神戸」だった。

当時、阪神・淡路大震災から7年めを迎え、神戸市では「ありがとう神戸」というイベントを計画。神戸市と水谷さんは、復興から立ち直りつつある人々の笑顔を、世界の人々に見てもらうことで支援の恩返しをしようとしたのだ。

ともだちをいっぱいつくりたい。

実は、水谷さんは、震災直後、「がんばろう神戸」と書かれたポスターを自費で制作し、東京の私鉄数社に掛け合って駅構内に貼らせてもらうなどして神戸の人々を励ました。それが縁で、神戸市から声がかかったのだ。

水谷さんの撮影した笑顔は、デパート内のイベントスペースのほか、駅構内の柱などにも貼られた。

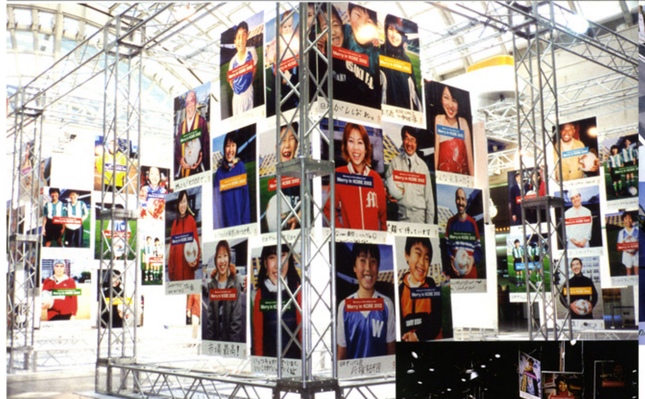
美術館でお金を取って見せるのではなく、街の中の暮らしのスペースに展示する。それが、21世紀のアートだと水谷さんは考えている。サッカーワールドカップ神戸開催に合わせて、新長田駅南の再開発現場につくられた工事用フェンスも、そんな街の中の作品のひとつ。子供を中心に22の大きな笑顔が現場を囲んだ。

「仮囲いに広告が入ることはあるけれど、そこにはストーリーがない。神戸の場合、人々が震災から立ち直ろうとしている場所で笑顔を見せることに必要性と社会的な意味がある。バブルのころのように、ただ面白がってやる時代ではないと、今すごく思うんです」

アートの世界で高い評価を受けたこの仮囲いには、そこに暮らす人からの反響もあった。

「近くにある焼肉屋のおばさんが言うんです。ここを通ると、震災を思い出して涙が出てくるけど、こんな笑顔を見ていると、私も頑張らなあかんと思うと。それを聞いて、ああ、メリーをやっててよかったなと思いました」

水谷さんが、笑顔のもつパワーを肌で感じた瞬間だった。



▲ワールドカップの成功にひと役買った「メリーイン神戸2002」。水谷さんは、子供から大人まで300人以上の笑顔をカメラにおさめた。

▶初めて大々的に行われた東京・ラフォーレ原宿でのイベント。TV番組で紹介されたこともあり、撮影を希望する少女たちが長い列をつくった。

◎アートディレクター **水谷孝次氏**

みずたに・こうじ　1951年名古屋市生まれ。大学で電子工学専攻後、デザイン会社に勤務。83年水谷事務所設立。ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ展金賞など数々の賞を受賞。そのほか福岡ダイエーホークスのタカのロゴ、飲料「ウィダーインゼリー」のパッケージも水谷さんのデザイン。

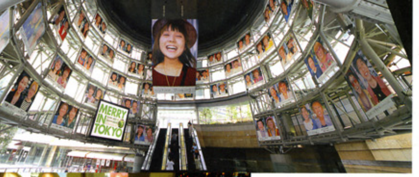
80年代から商業デザインの世界で活躍し、業界で名前を知らない人はいないほどの有名人である水谷さん。東京都内の駅に貼ってあるポスターのほとんどが、彼によるデザインのものという時期もあったそうだ。

「バブルのころは徹夜ばかりして、お金もたくさん稼ぎました。でも、団塊の世代である僕は、何とかして社会や地球をよくしようと思ってグラフィックデザイナーになった。それなのに、やっていたのは商業ポスターという企業の芸者みたいなことばかり。人生、これでいいのかと思い始めた」

そんなとき、それまで趣味で撮りためた写真を何気なく見てみると、大部分は人々の笑顔であり、幸せそうな表情だった。それは、自分が手掛けた商業デザインとは違う感覚のものだったという。

「無意識のうちに、笑顔や幸福を大事にしてきた。それが本当に自分のやりたいことなのかなと。自分の好きなことを、社会をよくするために生かせればいちばん幸せだなと思った」

99年、水谷さんは、アメリカ旅行中にたまたまバスの中で撮った子供たちの笑顔の写真を、企業のPRに使った。その反響の大きさに「何かやれる」と、笑顔がもつ力を確信する。それが写真集になり、メリーにつながっていったのだった。



▲東京・六本木ヒルズの円形ビルの内部を、大きな笑顔で埋め尽くした「メリーイン東京」(2003年)。

◀9.11テロから1年後の写真を展示したニューヨークでのメリー。壁から床まで笑顔でいっぱいに。

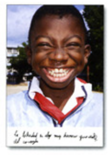
LIBERDADE pan MUNDO

"メリー・ゴー・ラウンド"言葉が通じなくても、笑顔と幸せは巡りめぐる。

メリーは、神戸のほかにも、困難から立ち直ろうとする人々を勇気づけている。2001年9月11日に同時多発テロが起こったアメリカ・ニューヨークの人々だ。

テロが起こったのは、奇しくも「ありがとう神戸」のオープニングの日。メリーとして何かしなければと強く感じた水谷さんは、1年後、ニューヨークを訪れた。

「テロから1年が経って、人々には元気になろうという意識がとても強かった。『あなたのメリーは?』という問いに対する答えも、"ラブ・アンド・ピース"が多かったですね」



◀ニューヨークで撮影した笑顔を手に、メリーな笑顔の水谷さん。「日本人、とくに男性は笑うのが下手」という。男性のみなさん、笑いましょう。

笑顔を撮らせてくれた人の中には、ビルから人が落ちるのを目撃したデザイン学校の女性生徒もいた。

「彼女が言うんです。本当はアメリカ人がやるべきことを、日本人であるあなたがニューヨークまで来てやってくれるのは、すごくうれしいって」

つらいときこそ、笑顔が大事であり、こういう時代だからメリーが必要。水谷さんはそう実感した。

making music makes me extremely happy.

水谷さんの撮りたての笑顔が見られるのが、現在、愛知で開催中の「愛・地球博」で行われている「メリー・エキスポ」。その作品の撮影旅行で、水谷さんは約20カ国を回り、人数にして1万人以上の笑顔をカメラにおさめた。その旅行中にも、水谷さんが笑顔のもつ力を目の当たりにする場面があったという。

中国・上海の崇明島にある農村を訪れたときのこと。いざお年寄りたちを撮ろうとすると、案内役の共産党幹部は、水谷さんが面白いと思う人物を撮らせてくれない。

「本人もやりたいといってるのに、ダメだと。なんだ、選別しやがってとガッカリした」(水谷さん)

それでも、水谷さんが撮影のためにその場を盛り上げると、ものすごい笑いに包まれた。

「そうしたら、その幹部の口から思わず、"スマイル・イズ・ビューティフル"という言葉が出た。それを聞いたとき、僕はものすごく感動しました」

中国では、水谷さんが逆に取材を受けた。その際、「あなたのメリーを教えてほしい」といわれ、"和顔愛語"と書いた。

「これは、仏教の教えで、『お布施をするお金がないときには、笑顔とやさしい言葉を施せば、それがやがて自分に返ってくる』という意味。笑顔とやさしい言葉はタダだから(笑)。メリーはこれと同じです。笑顔とやさしい言葉を与えつづければ、幸せは巡りめぐる。"メリー・ゴー・ラウンド"です。言葉が通じなくても、みんなで一緒に笑ったら、連帯感、一体感が生まれる。そうしたら、もう友達なんです」

プロジェクトにかかる費用の多くは持ち出し。お酒が飲めず、美味しいものにも興味がなく、ただ人々の笑顔を撮っているだけで幸せ。そんな水谷さんにとっては、メリー・プロジェクトが最高のメリーなのだ。

Every person, every place, every moment is beautiful. When I remember this, I am happy.
Merry means to be jovial, exuberant and to smile really really big!

撮影／永田忠[illegible]

笑顔のもつパワーを万博会場から世界に発信

水谷さんが世界中から集めたたくさんの笑顔は、名古屋・東部丘陵で開催中の「2005年日本国際博覧会」(愛称「愛・地球博」)の「Merry EXPO」で見ることができる。会場内の「愛・地球広場」(長久手会場)には、縦約8m、横約20mという大型ディスプレーを設置。「The world is one――きっと、ひとつになれる――」というコンセプトのもと、笑顔のもつパワーを世界に向けて発信している(上映は約10分×6回/日)。このほか、来場者が自分のカメラ付携帯電話で撮影した笑顔の写真をディスプレーに上映するイベントなども実施中だ。

「愛・地球博」には、私たち日立グループも出展しています

～ITを駆使して蘇った希少動物たちとバーチャルな触れあい～

パビリオンの名称は、「Nature Contact 日立グループ館 ユビキタス・エンターテインメント・ライド」。いつでもどこでも、映像・情報サービスを受けられる「ユビキタス社会」の実現に欠かせないインターネットや携帯表示端末技術、大容量の映像処理技術……。日立グループ館では、そうしたITを駆使し、絶滅の危機に瀕する希少動物たちを映像で再現。来場者のみなさんが愛らしい動物たちとふれあうことができるユビキタス体験ゾーンになっています。そのほか、「両面受光型太陽電池」をパビリオンの屋外に設置したり、発電の際に炭酸ガスと水蒸気のみを排出する「モバイル機器向け燃料電池」を館内の情報表示端末に採用するなど、21世紀に求められる新しいエネルギーシステムも提案しています。

出展場所：長久手会場 企業パビリオンゾーンB